

## 「社会彫刻」としての UNESCO ユースセミナー

—— パートナーたちが振り返る協働作業のこれまで ——

小貫大輔\*1・望月浩明\*2・星久美子\*3

はじめに ～ 社会彫刻としての UNESCO ユースセミナー（小貫大輔）

ユネスコ協同学校からユネスコスクールへ（望月浩明）

- ユネスコ協同学校とユネスコスクール
- 神奈川県ユネスコスクール連絡協議会発足までの道
- 東海大学とのコラボレーション ～ UNESCO ユースセミナーの開催へ

マルチカルチャーキャンプから UNESCO ユースセミナーへ（星久美子）

- ユースセミナーの「前史」～ マルチカルチャーキャンプの開催まで
- UNESCO セミナーでたいせつにしていること
- 混ざり合うことこそが「平和」！

おわりに ～ あきらめずに、粘土のように何度でもやり直すこと（小貫大輔）

はじめに ～ 社会彫刻としての UNESCO ユースセミナー

（小貫大輔）

東海大学教養学部は 2015 年度より ASPUnivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）に加盟し、主に神奈川県内のユネスコスクール<sup>1)</sup>を支援する役割を担ってきた。ASPUnivNet というのは、全国から手をあげた有志の大学が近隣の自治体にあるユネスコスクールの活動を支援するという日本独自の仕組みで、2008 年に 8 大学で始めたネットワーク活動が、2021 年 12 月現在までには 23 大学に広がっている。関東圏では、玉川大学の教育学部が ASPUnivNet 発足の当初からこのネットワークに参加して、東京・埼玉・神奈川・千葉・茨城のユネスコスクール支援を一手に担当してきたが、2015 年には東海大学教養学部が、2020 年からはさらに成蹊大学と創価大学教育学部・教職大学院が加わって、関東圏の学校を緩やかに分担してカバーしている。

ASPUnivNet に参加する大学は、それぞれの地域のユネスコスクールに対してそれぞれの大学の特色を生かした支援を提供している。東海大学教養学部の場合は、国際学科・人間環境学科・芸術学科という寄り合い所帯であることの利点を生かして「UNESCO ユースセミナー」という参加型イベントを毎年開催してきた。主に関東圏のユネスコスクールと様々な外国学校（インターナショナルスクールや民族学校など外国につながる学校）から高校生と教職員が参加して、国際理解教育、地球市民教育、環境教育というユネスコスクールの「3つの課題」の中から毎年ひとつのテーマを取り上げて議論する宿泊型のイベントだ<sup>2)</sup>。東海大学や玉川大学の大学生や留学生も参加して、国際学や人間環境学、教育学などの学びを生かして議論に貢献している<sup>3)</sup>。

個人的な思い入れにはなるが、私はこのイベントそのものをヨーゼフ・ボイス<sup>4)</sup>の言うところの「社会彫刻」と捉えてきた。「すべての人間は芸術家である」の言葉で知られるボイスは、自身が彫刻家でありながら「彫刻」とは、目に見える形を持った作品のことだけを言うのではないと説いた。人間や社会に対して創造的に働きか

投稿日 2021 年 12 月 22 日 受理日 2022 年 1 月 12 日

\*1 教養学部国際学科 教授

\*2 神奈川県ユネスコスクール連絡協議会 事務局長

\*3CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナル 事務局代表

ける行為はすべて「芸術活動」であり、その結果人の心や社会に刻まれるものは、一つの「社会彫刻」なのだ、という主張だ。本稿で述べられる「マルチカルチャーキャンプ」や「UNESCO ユースセミナー」の活動も、そのイベントが終わってしまえば形のあるものは何も残らないようであり、実は参加するものたちの心に何らかの残像を残し、その残像を通じてしっかりと社会にメッセージを伝えているのだと意識してきた。「参加者の心の中に平和のイメージを描く」ことは、まさにユネスコの存在する目的そのものだ。だからこそ、私たちは頭だけを寄せ合せて議論するのではなく、音楽や美術もふんだんに取り入れて、参加型のアクティビティを通じて参加者同士が体と心を使って出会えるようにと、自分たちの想像力と創造性をふりしぼってきたのである。

UNESCO ユースセミナーは 2015 年から毎年開催しているが、その実施主体は東海大学、神奈川県ユネスコスクール連絡協議会、CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナルという NGO の 3 者で作る実行委員会だ。それぞれの団体から複数のメンバーが実行委員会に入って計画を立案し、当日のイベントの実現に奔走している。本稿では、この実行委員会になくてはならない 2 人のキーパーソンを紹介したい。神奈川県ユネスコスクール連絡協議会で事務局長を務める望月浩明さんと、CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナルで事務局の代表をする星久美子さんだ。二人はユースセミナー誕生のときから実行委員会で中心的役割を担ってきたたいせつなパートナーたちである。

望月さんは、ユネスコスクールがまだ「ユネスコ協同学校」の名で呼ばれていた時代から運動に取り組んできた、神奈川の県立高校の地理の先生だ。若いときからユネスコ活動に深くコミットし、2000 年代後半からは当時停滞が顕著だったユネスコ協同学校（2008 年からはユネスコスクール）の再活性化に力を尽くした。2008 年には勤務校の神奈川県立有馬高等学校をユネスコスクールに加盟させることに成功し、2013 年には神奈川県内のユネスコスクールをまとめる連絡協議会を発足させた。現在はその事務局長として活躍している。

星さんは、東海大学教養学部（国際学科）の卒業生でもある。学生のときからブラジルでの長期ボランティア活動に参加し、帰国後は日本に住むブラジル人の子どもたちを支援する学生サークルを立ち上げ、ユースセミナーの前身である「マルチカルチャーキャンプ」を開催するなどした。「ベイジョ・メ・リーガ」というこのサークルは現在も活発に活動を続けており、2016 年には生活クラブ生協・神奈川より「キララ賞（かながわ若者生き生き大賞）」を受賞している。UNESCO ユースセミナーには、ブラジルでのボランティア経験者たちで作る団体、CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナルの事務局代表の立場から参加している。

以下に、お二人から UNESCO ユースセミナーとの関わりと、そして（私が勝手に命名した肩書きだが）「社会彫刻家」としてのそれぞれの熱い思いを文章にさせていただいた。望月さんからは、「ユネスコ協同学校」時代からのユネスコスクールの歴史と課題、神奈川県におけるユネスコスクール運動の発展、そして UNESCO ユースセミナーが生まれた経緯を、ご本人の「個人史」と関連させて語っていただく。星さんは、このセミナーの前身である「マルチカルチャーキャンプ」の時代から、それらのイベントのまさに「芸術的」とも言える側面を引っ張ってきた人だ。そういったプログラム作りの精神の背景にあるものを、やはり自身の「個人史」と重ねて語っていただこうと思う。



UNESCO ユースセミナーの紹介動画へのリンク QR コード

## ユネスコ協同学校からユネスコスクールへ

（望月浩明）

### ユネスコ協同学校とユネスコスクール

1953 年、ユネスコ憲章に示された理想を実現し、平和や国際的な連携をそれぞれの学校において実践し、促進するための「ユネスコ協同学校」という制度が設立された。ユネスコではこの制度を Associated Schools Project Network (ASPnet) と呼ぶが、日本では当初これを「協同学校」と称した。発足のときから日本の学校も 5 校が参加し、神奈川県からは川崎市立田島中学校が加わって特色ある活動を開始した。その後、世界各国で多くの学校が加盟し、国境を超えた協働学習プログラムも実施されるようになった。1980 年時点で日本の加盟校は 23 校

(小学校 4 校、中学校 11 校、高校 8 校) に増え、「人権の研究」、「他国の研究」、「国連の研究」などのテーマを中心に研究が続けられた。

1974 年にはユネスコによる初めての「国際教育勧告」<sup>5)</sup> が出され、国際理解・国際協力をさらに進めて地球的な課題解決のためにできることを考えていこうという方向性が示された。国際間の交流や国際的課題解決への試みが活発になる一方、国際理解教育はいくつかの分野に枝分かれしていった。当時は、急速な経済発展によって日本の企業がどんどん海外に進出していった時代でもある。帰国（海外）子女の教育や外国語教育の必要性がクローズアップされ、そういった教育が「日本型の国際理解教育」と言われるようにもなった。一方で、民間教育団体や NPO/NGO による開発教育、グローバル教育、地球市民教育も盛んになり、新たな切り口での国際理解教育に取り組む課題解決型のアプローチも盛んになっていった。こうした流れの中で、国内のユネスコ協同学校の活動の方は次第に衰退していき、やがて自分たちの学校が協同学校だったことも忘れてしまう学校も現れるようになっていった。

ユネスコ協同学校はなぜ衰退したのか。その要因としては、活動の中心が調査研究活動であったため、多くの場合教員主体で児童生徒主体とはならなかったこと、加盟校の多くが公立学校であったため教員の退職、異動などによって活動の継続性に困難があったこと、また活動がほぼ当該の学校の中だけにとどまり学校間の交流が少なかったこと、学校間交流や協働のためのネットワークが作られなかったこと、などがあげられている。皮肉なことには、上にあげた「日本型の国際理解教育」が浸透してきたことも、ユネスコ協同学校の存在意義が薄まる要因となったと言われる。

当時、国内の協同学校の活動は停滞していたが、海外の地域によっては協同学校（ユネスコスクール）の活動が非常に盛んで、国を超えた国際協働学習プログラムも実践されていた。やがて 1992 年の「地球サミット」、そして「2002 年のヨハネスブルグサミット」などを通じて「持続可能な開発」が世界的に話題となっていく、2004 年には日本が「持続可能な開発のための教育（ESD）の 10 年」決議案を国連総会に提出し、採択されるにいたる。2005 年から「持続可能な開発のための教育の 10 年」がスタートし、ユネスコは ESD の主導機関になって 2014 年には日本で「持続可能な教育に関する世界会議」が開催されることも決定された。そうした情勢を背景に、日本ユネスコ国内委員会は 2008 年「持続発展教育（ESD）の普及促進のためのユネスコスクール活用について」と題する提言<sup>6)</sup> を出して、ESD 推進の役割を協同学校（2008 年からは呼称をユネスコスクールと変更）が担ってゆくことを想定して、政府主導で加盟校の数を増やしていくことになる。

ESD の目指すところは持続可能な社会の担い手を育てる教育の実現であり、国際理解・環境・多文化理解・人権・平和・防災など様々な切り口やテーマからの学習が可能である。こうした教育を実現するためには、国内外の様々なジャンルの学校や諸団体・諸機関との間で、児童・生徒間交流、教職員間交流、諸団体メンバーとの交流のネットワークを構築することが必要となる。日本で使われている「ユネスコスクール」という呼称の本来の名称は「ASPnet (Associated Schools Project Network)」であり、世界の様々な学校が「ネットワーク」を作り、力を合わせてユネスコ発足当時の理念や持続可能な社会の実現を目指すものである。ユネスコスクールに求められるのは、単独での活動ではなく、様々な学校・機関・団体などつながって活動することなのだ。

### 神奈川県ユネスコスクール連絡協議会発足までの道

私（望月浩明）自身とユネスコとの関わりは、1994 年の「日本ユネスコ協会連盟」主催の高校生スタディツアーの引率だった。1997 年からは、「全国高校ユネスコ研究大会」というイベントにも参加するようになった。全国のユネスコクラブや地域ユネスコ協会などでユネスコ活動に携わる高校生が、毎夏一堂に会して 3 泊 4 日の時間をともに過ごす催しだ。やがて「全国高校ユネスコ指導者連絡協議会」にも加わり、この大会の運営を担うようにもなった。「全国高校ユネスコ研究大会」は半世紀以上も続いたが、第 53 回の沖縄大会を最後に休止されることとなった。私は、最後の大会のときの協議会理事長だったので、自分の代で大会を終えてしまったことを今でも残念に思っている。いつの日か、もう一度ユネスコに関わる高校生たちの大会を開催したいと願っている。

その後、日本ユネスコ協会連盟主催の高校生向け海外スタディツアーや、ACCU（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター）のワークショップなどに参加する中で「ユネスコ協同学校」の存在を知った。2006 年、国際

理解教育推進校で在県外国人生徒特別募集枠校・外国語コース設置校でもあった神奈川県立有馬高等学校に転任し、勤務校を「協同学校」に登録するための準備を始めた。当時、「協同学校」の運動は衰退しており、加盟校も少なく（2005年までは16校だけの登録数）、一部の学校を除いてはほとんどが休眠状態になっていた。有馬高校が加盟することでユネスコ協同学校のネットワークの再活性化に尽力しようと、事情に詳しい帝塚山学院大学の米田先生に相談してみた。すると、ユネスコ国内委員会は協同学校を「ユネスコスクール」という形で再構築する計画なので、その段階で登録してはどうかという助言をいただいた。協同学校からユネスコスクールに変わる前年（2007年）に加盟申請をおこない、翌2008年、有馬高校はユネスコスクールとして認定された。この年、ユネスコスクール加盟校は78校に増加している。

神奈川県内ではその後、2010年に横浜市立永田台小学校、2011年に横浜シュタイナー学園、2013年に横浜国立大学付属小中学校がユネスコスクールに参加するなどして、現在では12校がこの活動に参加している。神奈川県内のユネスコスクールが徐々に増加する中で、このユネスコスクールがかつての協同学校のように衰退することがないようにといろいろ考えた。私は、協同学校の運動は学校間のネットワークの不在がウィークポイントだったと考えている。それで生まれてきたのが、神奈川県内のユネスコスクールをつなげるネットワーク組織の発想だ。当時、永田台小学校でユネスコスクール活動に意欲的に取り組んでいた住田昌治校長に呼び掛け、県内のユネスコスクールをつなぐ連絡協議会を立ち上げることになった。

ASPUivNetの玉川大学教育学部、東海大学教養学部も加わって、「神奈川県ユネスコスクール連絡協議会」が発足したのは2013年。その目的は、「県内外のユネスコスクール学校間ネットワークを相互活用し、様々な場で交流し、情報や体験を分かち合い、地球規模の諸問題に児童・生徒が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、研究、実践を進めること、持続可能な社会の担い手を育てること（ESD）、地球市民教育（GCED）を広げていくこと」とされた。

第1回目の神奈川県ユネスコスクールセミナーは、2013年8月25日に横浜国立大学付属鎌倉中学校を会場として開催された。その後、この会合は名称を「神奈川県ユネスコスクール大会」と変えて毎年継続して開かれ、実践発表や講演会、ワークショップなどを実施してきている<sup>7)</sup>。連絡協議会は、年次大会の開催の他にも情報交換会を開き、ユネスコスクールの関東ブロック大会や全国大会で分科会を担当し、東海大学のUNESCOユースセミナーを協働で企画・運営し、ユネスコスクール活動に関する情報提供もおこなっている。連絡協議会には、神奈川県内のユネスコスクール、ASPUivNetの加盟大学、そしてユネスコスクールに加盟申請中の学校（キャンディデート校）が参加するほか、ユネスコ活動や国際理解教育、あるいはESDやSDGsに関心のある一般の人たちも参加して、自由で緩やかな連合体として活動している。

### 東海大学とのコラボレーション ～ UNESCO ユースセミナーの開催へ

東海大学教養学部が2015年に「UNESCO/ESD 交流セミナー2015～未来の学校について考えてみよう～」を開催した際には、神奈川県ユネスコスクール連絡協議会のメンバーも企画段階から参加して協力した。東海大学教養学部はその年にASPUivNetに加盟したばかりだったが、このセミナーを通じて連絡協議会のメンバーと良い協力関係が築けたと思う。その後、東海大学はASPUivNetの中で神奈川県のユネスコスクールへの支援を担当することになる。

神奈川県の中にはたくさんの外国学校がある。朝鮮学校や中華学校の存在はよく知られるが、1991年に横浜市に移転してきた東京横浜独逸（ドイツ）学園も100年以上の歴史を持つ伝統校だ。近年は、様々なタイプのインターナショナルスクールが何校も県内に開校されている。神奈川県ユネスコスクール連絡協議会のメンバー校にも、隣人との交流から国際理解教育や多文化教育を推進したいという思いがある。私が2017年まで勤めた有馬高校にはかつて在県外国籍生徒募集枠があり、様々な国の生徒が学生生活を送っていた。そうした背景の下、同じ海老名市内にあるブリティッシュインターナショナルスクールとの交流をすすめている。南アジア出身のイスラム教徒の子どもが多く通う学校だ。他のメンバー校でも、近年、外国につながる児童生徒の数が増えており、「内なる国際理解教育」とも言える多文化教育の必要性を実感するところだ。それで、2016年度から県内の外国学校の生徒や教員、その他外国につながる子どもたちやユース、留学生に広く呼びかけた会を開催することにな

った。イベントの名前も、「UNESCO/ESD 交流セミナー」から「UNESCO ユースセミナー」と改名された。

私にとって、このユースセミナーには特別な期待がある。上にも書いたが、以前「全国高校ユネスコ研究大会」の理事長をしていた当時、その大会が第 52 回の沖縄大会をもって休止になってしまった経験がある。それによって、ユネスコ活動に参加する高校生たちの学校を超えた交流や活動発表の場がなくなってしまったことが心残りとなってきた。今、UNESCO ユースセミナーを通じて、学校、校種、年齢、文化を越えてユースが集うことが可能になったことはとても重要なことだと考えている。このセミナーには、ユネスコスクールの加盟校だけでなく、様々な国につながる外国学校からもたくさんの参加がある。ユネスコスクールの中にも、日本の制度では正規の学校として認められず NPO 法人立で一種のフリースクールとして運営されている横浜シュタイナー学園も入っている。また、それらの学校の生徒や教師だけでなく、大学生や留学生、そして応援に駆けつけた社会人も参加して、様々な世代の参加者が年齢を超えて交流している。言語や文化、教育の方法も違う様々な種類の学校が集うこのユースセミナーは、何かユネスコの心を刻んだ「トーテムポール」のようなイメージを連想させる。小貫さんの言う「社会彫刻」とは言い得て妙で、このセミナーのことをよく表現していると感じる。このような空間的な広がり、そして時間的なつながりによって、ユネスコ活動はより深みを増していくことだろう。

### マルチカルチャーキャンプから UNESCO ユースセミナーへ

(星久美子)

#### ユースセミナーの「前史」～ マルチカルチャーキャンプの開催まで

ここまで、望月先生が神奈川県ユネスコスクール連絡協議会の事務局長として「ユネスコスクール」の視点から UNESCO ユースセミナーの背景を語ってくださったので、私は「外国学校」の視点からこのセミナーの起源について考えてみたいと思う。私が UNESCO ユースセミナーの企画に携わるようになったのは、主催者団体の一つ CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナル<sup>8)</sup>の事務局代表をしているからでもあるが、私自身日本に住むブラジル人の子どもたちのことに深く関わってきたからでもある。望月先生がご自身の個人史を語ったように、私も学生時代からの体験を振り返ることから始めてみたい。

私は東海大学（教養学部国際学科）の卒業生である。入学当初はいたって「普通」の学生で、勉強よりも大学生になった解放感の方を満喫していた。転機となったのは、2年生の春休みに参加した「ブラジルスタディツアー」だった。飛行機を乗りついで 27 時間もかけて到着した地で、現地の若者たちと建設作業をしたり、保育園の仕事を手伝ったりする中で、ブラジルの人たちのあたたかさ、陽気さ、愛くるしさに魅了された。その後、3年生の秋学期にスタディツアーに共に参加した仲間 2 人とブラジルに戻り、小さな漁村で半年間ボランティアとして滞在した。赤道から 3 度しか離れていない常夏の漁村で、四六時中水着でいるような生活を送った。村では、十代の女の子たちの非行や予期せぬ妊娠が問題となっていて、将来のこと、避妊のことなどについて語り合う週に一回の「女子会」を開く活動をした。

半年間のブラジル滞在中、文化や言葉が異なっても友情を育めることを体験し、ポルトガル語も話せるようになって帰国した。4年生になってからは、大学から電車とバスで 1 時間半ほどのところ（厚木市の北端）にあったブラジル学校「アクアレラ」に通い始めた。大学の友人たちと始めた活動で、校長先生からは小学生に日本語を教えてほしいと言われた。しかし、狭い校舎と校舎脇の駐車場で一日を過ごす子どもたちは、外に出て遊びたいと言いつつ、学校から 30 分ほど歩いたところには自然豊かで広々とした公園があり、私たちはその公園を青空教室にして、日本の遊びや自然との触れ合いを体験する授業をすることになった。

「アクアレラ」には 0 歳から 10 代後半までの子どもたちがいて、ポルトガル語でブラジルの教育カリキュラムに則って学習している。日本人の教員はおらず、日本語ができる子どもはいなかった。「デカセギ」として来日した日系ブラジル人の親たちは、工場などで朝から夜遅くまで働き、子どもたちは一日の大半を学校で過ごす。日本人・日本語に触れる機会は実に少ない。もちろん公立学校に子どもを入れる親もいるが、いつブラジルへ帰国するか分からないことと、いじめや母語の喪失の恐れもあって、ブラジル学校に通わせる人も多い。ブラジル学校は、工場地帯のある自治体にはどこでもと言っていいほど存在する。そういう学校の子どものために、私たちにできることはないか。そう考えて「マルチカルチャーキャンプ」という交流会を開くことにした。大学

に相談して「ベイジョ・メ・リーガ (Beijo Me Liga)」という学生団体を立ち上げると、学生の活動を支援するチャレンジセンターからプロジェクトへの資金協力も得られるようになった。国際学科だけでなく、芸術学科や工学部などからも国際交流に興味がある学生や留学生たちがメンバーになってくれて、キャンプ当日には茨城県、群馬県、岐阜県のブラジル学校から教員・生徒 150 人ほどが参加してくれた。湘南キャンパスに 2 泊 3 日で宿泊し、日本語に触れる遊びやグラウンドでの運動会、ペットボトルロケットの打ち上げなど、盛りだくさんなプログラムを企画した。

キャンプ初日には、13 号館の中庭で巨大な絵を描くことをした。絵のテーマは「平和」だった。ピカソのゲルニカと同じサイズのキャンバスを用意し、その下に大量のビニールシートを敷いて絵具を用意した。日本語ができない子どもたちとポルトガル語ができない学生たちが初めて出会う日に、いっしょに絵を描くことからスタートしようと考えたのだった。参加者たちは、真っ白なキャンバスの上に立たされ、困惑している様子だった。すると、誰かが近くにいた人の体に絵具をべたっと付けた。なんと、絵具の付け合い合戦が始まってしまったのだ。追いかける、逃げる、転ぶ、絵具を倒す…、真っ白だったキャンバスが、最初は色とりどりに、やがてすべての色が混ざり合って黄土色に染まっていった。私は言葉を失った。そこにあったのはただの「平和の絵」ではなかった。その空間自体が、「平和」そのものだった。

「平和の絵」がアイスブレイクとなり、3 日間のキャンプは本当に楽しい時間となった。ブラジル学校の生徒から「初めて日本人の友だちができた」と言われて、私たちは本当にキャンプを開催してよかったという思いで心がいっぱいになった。学生団体の最初のメンバーたちが卒業した後も、マルチカルチャーキャンプは毎年在校生たちによって開かれている。新たなブラジル学校が参加したり、こちらからブラジル学校へ出向いたりもしている。「平和の絵」は恒例のプログラムとなった。「絵具まみれになるキャンプ」と思っている人もいるようだ。

#### UNESCO ユースセミナーでたいせつにしていること

卒業後、青年海外協力隊を経て、認定 NPO 法人「開発教育協会 (DEAR)」の職員となった。世界の貧困と格差、環境問題といった人類レベルの 이슈について知り、自分事として考えてもらうための教材を開発し、ワークショップを実施する NGO だ。私も、ファシリテーターとしてワークショップをおこなう機会が多くあった。DEAR で学んだことは多いが、中でも UNESCO ユースセミナーでたいせつにしていることがある。それは「参加の保障」だ。

DEAR のワークショップでは、グループで意見交換をするときには、すべてのメンバーが発言できているか、参加できているかに特に注意をはらってファシリテートする。そのためには、「相手の意見を否定しない」などのルールも事前に知ってもらう。参加者の多様性への配慮を怠らないこともたいせつだ。車椅子の方や難聴者が参加するときは事前に駅から会場まで段差のないルートを確認し、要約筆記や手話通訳の手配をする。UNESCO ユースセミナーには日本語の苦手な参加者が多い。ポルトガル語や英語の使用を歓迎する雰囲気を作ることも重要だ。また、いつも必ずイスラム教徒のメンバーがいるので、その人たちだけに別の食事をしてもらうのではなく、全員でハラール料理を食べるといった取り組みをしている。

参加者同士の「ファーストコンタクト」をオーガナイズする際、アイスブレイクは欠かせない。セミナー会場に着いた参加者たちは緊張しており、たいていは同じ学校のメンバー同士でかたまっている。体を使ったアクティビティでそのかたまりをばらけさせ、学校、言語、文化が混ざるようにグループ分けをしていく。日本語、英語、ポルトガル語の話者をうまく組み合わせ、なんとかコミュニケーションがとれるようなグループとなるよう心がけている。完璧な会話ができなくても、なんとなく意思疎通ができればいいと考えている。

UNESCO ユースセミナー 2 年目の 2016 年からは、神奈川県内外の外国学校 (エスニックスクールやインターナショナルスクールなど外国につながる学校) にもたくさん声をかけるようになった。参加者の文化背景が多様になったことでセミナーの雰囲気が一変し、多角的な視点からの発言が議論のスケールを広げた。高校生である参加者たちは、文化と言語の違いを越えて「友だち」になっていった。いわゆる「マイノリティ」とされる参加者たちからは、たびたび「差別」の実体験が語られる。ヒジャブをしていることや、外見が日本人に見られないこと、政治的な理由からの差別体験を語る生徒もいた。企画者である私たちは、そういった発言を予測し、丁

寧に扱わなくてはいけないと思っている。セミナー後半になって、参加者同士が仲良さそうに話している姿を見るとほっとする。

### 混ざり合うことこそが「平和」！

2016年からは、神奈川県内の外国学校に広く参加を呼びかけるようになったと書いた。その年のユースセミナーには、民族学校やインターナショナルスクール6校の生徒や教員が参加してくれて、日本のユネスコスクール6校、そして東海大学からの参加者と交流を深めた。1泊2日という時間の中で、異種学校間での緊張も次第にとけていき、楽しい時間を過ごすことができた。そのときに参加してくれた教員の皆さんには、その後のユースセミナーでも中心的な役割を果たしていただくようになった。

小貫先生は「社会彫刻」という言葉を使うが、私たちが体験したことの素晴らしさを目に見える形で発信していくことの重要性を感じている。セミナーの後には、必ず動画や冊子の形で記録を作るようにしてきた。2016年のセミナーも、カラフルな報告書と動画の形で記録に残した。報告書には参加者が歌い、笑い、語らいあう姿を捉えた写真が満載されている。この時間を一緒に過ごしたメンバーたちを記録しておこうと思い、参加校すべての名前をリストにして連ねた。

ところが、である。このセミナー開催に資金援助をしてくれた文科省から、「報告書から朝鮮学校の名前は削除してほしい」との連絡が入ったのである。国の予算を使ったプロジェクトで、朝鮮学校が被益することは許されないのだそうだ。ユネスコ活動とは、「心の中に平和の砦を築く」ことが目的なのではないのか。もちろん、朝鮮学校だけの名前を削ることはできない。仕方がないので、参加校の名前をすべて削除して報告書を出すことになった。

日本社会はますます多文化化している。しかし、私たちがそこから恩恵を受けている実感はあるだろうか。いろいろな言語、文化、考え方が入ってきてはいるが、出会い、混ざり合わないことにはその恩恵に気づくこともないだろう。マルチカルチャーキャンプやUNESCOユースセミナーをやってきて思うのは、異なるものを否定するのではなく、混ざり合うことこそが「平和」なのだということだ。それは、参加者も体感していることだと思う。「今」、「ここ」にいる全員が参加できるようにするには、ホスト社会が配慮・工夫する必要があるだろう。互いに完璧を求めるのではなく、100%伝わらなくても、理解しきれなくても、折り合いを付けて進めていかなくてはいけないことがあるのではないか。

学生時代に私が出会ったブラジル学校の子どものことを思う。あの子どもたちと同じように、外国人が孤立している状況は今でも日本中で見られる。ホスト社会が何もしなければ、外国人たちはこれからも「パラレルワールド」で生きていくことになるだろう。私たちのUNESCOユースセミナーが、そんな状況を少しでも変えていく力になれたらうれしいと思う。もちろん、こんなセミナーを年に一度開催したところで、社会が変わるわけではないかもしれない。しかし、参加した人たちがそれぞれの価値観を少しずつでも広げることができたなら、そしてそこから周りに広がっていくものがあつたら…、ユネスコの目指す「心の中の平和の砦」とは、そういう風にして築いていくものなのではないだろうか。

おわりに ～ あきらめずに、粘土のように何度でもやり直すこと

(小貫大輔)

本稿では、私たちが2015年以来毎年開催してきたUNESCOユースセミナーについて、それを一緒に産み育ててきたパートナーたちの目で振り返ってもらった。できることなら「社会彫刻」という目で振り返ってもらいたいとお願いした。神奈川ユネスコスクール連絡協議会の望月さんも、CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナルの星さんも、この言葉にすぐにピンときたようだった。望月さんにはトーテムポールのイメージが湧いてきたようだった。多様な学校の多様なメンバーが集まる私たちのセミナーは、確かにトーテムポールに似ている。トーテムポールには陸海空の様々な動物がいくつも彫られるが、そこには一つの物語が存在するそうだ。UNESCOユースセミナーにはバラバラの学校が集まっているようにも見えるが、実は日本の社会がグローバル化していくプロセスの最先端の物語を読むことのできる場でもある。

星さんには、学生のときに開いた「マルチカルチャーキャンプ」で描こうとした平和の巨大絵が思い出されたようだ。絵のキャンパス全面が結局黄土色一色に染まってしまったとき、(実は私もその場に居合わせたのだが)星さんが「止めなくていいよね。この様子こそが平和そのものだもんね」と言ったのが忘れられない。私には、その大騒ぎを「言葉を失って」見ていた星さんの姿もまた「社会彫刻」だと思えた。

私は、というと、実は作りかけて途中でつぶしてしまった粘土の作品のような思い出が、今でも気になっている。星さんの文章の中にも出てくるが、2016年の報告書からその年のユースセミナーの参加学校の名前を削除せざるをえなかった苦い体験のことだ。その後数年にわたって朝鮮学校の名前を活動報告書に記録しようとチャレンジしたが、「文科省の資金を使う限りは載せられない」という返答は変わらなかった。担当の部署にしてみれば、日本のユネスコスクール運動に不要な政治的介入をさせないための配慮なのだろうが、その後は文科省の予算を使わず、大学とCRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナルの資金だけを使ってこのユースセミナーを開催してきている。

2016年の出来事を思い出すたびに、世界のユネスコスクールの歴史で誰もが重要だったと振り返る「バルト海プロジェクト」という環境教育の国際協働プロジェクトが想起される。冷戦終盤の1989年、バルト海を囲む国々の学校がユネスコスクール間の協働を目指し、「鉄のカーテン」を超えてつながり交流を始めたものだった。このプロジェクトには、ソビエト連邦の学校だけでなく、当時はまだソ連の一部だったエストニア、ラトビア、リトアニアの「バルト三国」の学校も参加した<sup>9)</sup>。「ユネスコは政治を超える」という強いメッセージを世界に伝え、国同士の争いがあるときにこそユネスコスクール同士で続ける交流がたいせつなのだと感じさせた。今日も続くこのプロジェクトは、その後、世界各地で「模写」され、同じような国際協働の精神を宿すプロジェクトが生まれていくときのモデルとなった。このようなプロジェクトこそを「社会彫刻」と言うのだろう。

日本では、様々な理由で正規の学校(いわゆる「一条校」と認められない学校がある。しかしユネスコスクールのネットワークには、正規・非正規の区別なくどんな学校でも参加することができる。実際、日本のユネスコスクールには、いくつもの非正規学校が参加して活躍している<sup>10)</sup>。「文科省には認められなくても、ユネスコには認められた」という思いが、それらの学校にはあるようだ。このような機会でもなければなかなか一般の学校と交流する機会も少ないそれらの学校が、ユネスコスクールのネットワークでは対等に扱われ、精力的に情報を発信してネットワーク活動に貢献している。一般の学校にしても、普段は知る機会の少ない教育のオルタナティブを知る貴重な機会となっていることだろう。

朝鮮学校をはじめとする様々な民族学校やインターナショナルスクールにしても、ユネスコスクールのネットワークには加盟できるはずだ。ユネスコスクールが「心の中に平和の砦を築く」ことを目的とするものであるなら、政治的に対話が困難な学校にこそ参加してもらい、学校と学校、教師と教師、生徒と生徒のレベルで対話を促すことにこそ意味があるのではないか。1989年当時の「バルト海プロジェクト」も、もし西側か東側かどちらかの国からしか参加がなかったとしたら、まったく意味のないプロジェクトになりかねなかっただろう。同じように、日本のユネスコスクールも真の国際理解教育、地球市民教育を実現しようとするなら、隣人を排除したネットワークを築いてはいけないはずだ。

UNESCO ユースセミナーは、2021年に第8回目の会が開催された。神奈川県内のユネスコスクールや関東圏の様々な外国学校が参加し、オンラインとは言え密度の濃い会となった。神奈川県朝鮮中高級学校は、今でも毎年のセミナーで活躍するたいせつなパートナーだ。「社会彫刻」も、彫塑をやっているのだと思えば、作りかけの作品を何回もつぶして作り直せばいいのかもしれない。たいせつなのは、あきらめないことだと思う。

1) ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章に示された「人間の心の中に平和の砦を築く」という理想実現のための国際的な学校間ネットワークとその加盟校のことをいう。加盟校は、それぞれの教育において国際理解教育や地球市民教育、環境教育を推進し、加盟校同士で国内的・国際的に交流し、そのネットワーク活動の成果を地域の学校に還元していくことを求められる。神奈川県では現在12校が加盟しており、さらに2校が「キャンディデート校」として加盟承認に向けて活動をしている。

2) 2020年度および2021年度については、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑みて宿泊を伴う形での開催を断念し、



- オンラインで開催した。
- 3) これまでの UNESCO ユースセミナーの様子や、そこからの多文化主義・間文化主義的な学びについては、小貫・星 (2020) および小貫 (2021) に詳しい。
  - 4) ヨーゼフ・ボイス (Joseph Beuys, 1921-1986) はドイツの現代美術家・彫刻家。「芸術」の概念を拡張し、人間が意識的・創造的に社会に働きかける行為はすべて芸術活動なのだを主張した。
  - 5) 1974年11月19日に第18回ユネスコ総会で採択された「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告 (Recommendation concerning Education for International Understanding, Co-operation and Peace and Education relating to Human Rights and Fundamental Freedoms)」。
  - 6) 提言の全文は文部科学省の以下のサイトで閲覧できる。<https://www.mext.go.jp/unesco/009/004/013.pdf>
  - 7) 2020年および2021年の神奈川県ユネスコスクール大会は対面ではなく、オンラインでの開催となった。
  - 8) CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナルは、1988年に創設された日本の国際協力 NGO。ブラジルの貧しいコミュニティでボランティアとして働いたメンバーたちが、日本に帰国後も続けてブラジルの子どもたちを支援することを目的に活動している。2006年からは日本のブラジル人コミュニティへの支援も開始し、主にブラジル学校の子どもたちと日本の社会をつなぐ活動をおこなっている。
  - 9) 1990年発行の *The Baltic Sea Project Newsletter* によると、当時のソビエト連邦からの参加校 27 校中、エストニアの学校は 7 校、ラトビアの学校は 5 校、リトアニアの学校は 8 校だったようだ。リトアニアはプロジェクト開始の翌年、1990年3月に独立を宣言し、1991年1月にはソ連軍との衝突(血の日曜日事件)で死者も出している。1991年の8月にはエストニア、ラトビア、リトアニアの3国そろって独立を実現させ、同年12月のソビエト連邦の崩壊へ大きな影響を与えた。
  - 10) 日本のユネスコスクールの圧倒的多数はいわゆる「一条校」の学校と保育園やこども園だが、非正規の学校の中からも、箕面こどもの森学園、京田辺シュタイナー学校、東京賢治シュタイナー学校、横浜シュタイナー学園(以上、NPO法人立学校)とコリア国際学園(各種学校)がユネスコスクールとして認定されている。横浜シュタイナー学園は、神奈川県ユネスコスクール連絡協議会のメンバーであり、UNESCO ユースセミナーの重要なパートナーでもある。

#### 参考文献

- 小貫大輔・星久美子 (2020) 「UNESCO ユースセミナーにおける多文化共修型「地球市民教育」: 文化、言語、民族を超えて共に学びあう」『東海大学紀要教養学部』50, pp.381-384.  
([https://opac.time.u-tokai.ac.jp/webopac/p381-384.\\_?key=OBTKOS](https://opac.time.u-tokai.ac.jp/webopac/p381-384._?key=OBTKOS))
- 小貫大輔 (2021) 「多文化主義 vs. 間文化主義論争と日本の外国学校: 「多文化子どもプロジェクト」活動の振り返りから見えてくるもの」『東海大学紀要教養学部』51, pp.217-223.  
([https://opac.time.u-tokai.ac.jp/webopac/16\\_p217-223.\\_?key=LOJEQO](https://opac.time.u-tokai.ac.jp/webopac/16_p217-223._?key=LOJEQO))
- The Unesco Associated Schools Project (1990) *The Baltic Sea Project Newsletter, 1(1)*.  
([http://www.b-s-p.org/upload/newsletter/bsp\\_newsletter\\_no\\_1\\_liisa\\_j%C3%A4%C3%A4skel%C3%A4inen.pdf](http://www.b-s-p.org/upload/newsletter/bsp_newsletter_no_1_liisa_j%C3%A4%C3%A4skel%C3%A4inen.pdf))

#### Abstract

### A “Social Sculpture” Named UNESCO Youth Seminar — Reflections on the co-production process by the partners —

Daisuke Onuki, Hiroaki Mochizuki, and Kumiko Hoshi

Since 2015, the School of Humanities and Culture of Tokai University has been a member of the ASPUnivNet, an inter-university network providing support to UNESCO's Associated Schools Network (ASPnet) in Japan. One of the activities we have been organizing is the annual inter-school gathering of the member schools of ASPnet in and around Kanagawa Prefecture. Since 2016, ethnic and international schools in the region have joined the event bringing a very intercultural taste to the discussions held by the mixed group of high-school and college-age youth and their teachers. In this article, the core members of the organizing committee of the gathering, Onuki, from Tokai University, Mochizuki from Kanagawa Network of UNESCO's Associated Schools, and Hoshi from CRI-Children's Resources International, reflect on the background history and the “spirit” of the youth seminar, viewing the co-production process of the youth seminar as a “social sculpturing”, a term coined by Joseph Beuys.